

## —火の見やぐらの見える風景—

NHK 放送用語委員会専門委員

元 気象庁天気相談所長

宮澤 清治

### 火の見やぐらの見える風景

かつて子供のころ、家ごとに回ってくる夜の防火当番に出たことがあった。

お出ましは隣家のあるじと私。道具では、拍子木と提灯(ちょうちん)。

外は凍て付くような星空。静まりかえった夜道を、提灯をかざし「火の用心」と唱えながら歩いた。

拍子木の音と「火の用心」の音が冴えて聞こえると、家の人々は安心して眠りにつばしいた。いまでも拍子木に加えて、火箸や鉄棒をひきずりながら夜回りをする地方がある。

近所に「火の見やぐら」があって火事の際は、隣のあるじが半鐘を打ち鳴らしたのを覚えている。火事が近くであることを知らせるときは、擦り半(すりばん)といって半鐘をつげざまに打ち鳴らした。

10年ほど前に、NHKカメラマンだった網代守男さんが「火の見櫓(やぐら)のある風景」という写真集を出した(東京・光村印刷株式会社発行)。その本の東日本編のはしがきに次のようにある。

「江戸時代から人々の暮らしを黙々と見

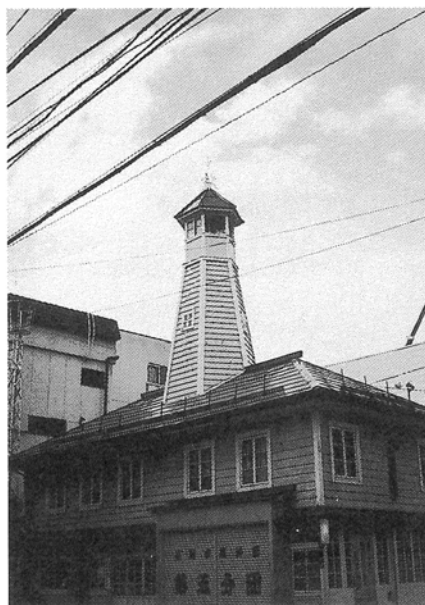


写真1 紺屋町番屋 (盛岡市)

守ってきた火の見櫓。かつては町や村のシンボルとして、集落ごとに1,2本は立っており、火災から家々を守ってきました。

そんな火の見櫓を中心に、自分たちの町や村には、自分たちの手で守ろうという郷土愛がありました。

そして、男たちも消防団を通して、人間として成長していきました。

しかし、火の見櫓は、119番体制が普及し、

ビルが乱立する近代化の波に押し流されて、年々その姿を消しつつあります。

東京消防庁では、昭和 49 年に望楼監視業務を廃止しました。

各地に残る火の見櫓や望楼も、役目を終えて取り壊される運命にあります。

この 15 年間、北海道から関東地方までの町や村に残る火の見櫓を撮り続けて来ました。火消しの時代から続いた火の見櫓の一生を、これからも、見つめていきたいと思えます。」

## 「火の見やぐら」の今昔

網代さんを手本にして、旅先で努めて「火の見やぐら」をカメラに収めることにした。

そのなかの幾つかを紹介しよう。

### ①紺屋町番屋(盛岡市)

昔陵かしい望楼のある番屋で、現在も盛岡市の消防団第五分団の番屋として現役を務めている(写真 1)。

大正 2 年に完成した建物で、望楼に登るためにらせん階段が設置されている。大正期の木造洋風建築の典型で、望楼のある景観は往時としては誠にハイカラである。消防の歴史を知るのに貴重な建物である。

なお、番屋とは、江戸時代、拍子木をたたいて時を知らせたり、町内の雑役にあたりたりする番人の住んでいた小さな家のことである。

写真 1 の望楼を見ると、昔の測候所の屋根の上に設置してあった「風力台」を思い出す。風力台には風向計、風速計、日照計などの測器を取り付けてあった。

### ②町角のミニ「火の見やぐら」(京都市)

2, 3 年前に京都市へ出かけたとき、京都駅の近く町角で、タクシーの窓からミニ「火の見やぐら」を見つけた。公民館のような屋根の上に木造の小さな「火の見やぐら」を取り付け、はしごを登って半鐘をたたくようになっている(写真 2)。

京都市には、昔からお互いに隣の「火の用心」を心配する市民性がある。町内の連帯的な防災意識が強く、自主防火(防災)組織を結成して火の用心を呼びかけたり、防災訓練をしたりしている。古都の景観や遺産を災害から守ろうとする熱意が町通りにあふれている。

昔の「火の見やぐら」は、近年の高層化と情報化の波に押し流されてしまった感がある。ハイテク時代になっても「火の見やぐら」から物を見つめるように、大所高所から物を考えるという気持ちだけは忘れたくないものだ。



写真 2 ミニ「火の見やぐら」(京都市)